

令和4年12月総評

今月も力作がならんだ。とくに惹かれた作品をいくつか。

向かいあう遠景を  
だっこひもに頼って  
くすんでいく  
鳥の声がきこえた

郡司和斗 茨城県

『向かいあう遠景』は何処かなつかしい場所のようにも思える。きこえる鳥の声はくすんでも消えないものとしてそこに置かれる。

うす汚い病院  
腕のない雪達磨

大橋 弘典 群馬県

『腕のない』と書くことで浮かび上がる喪失感。だからこそ雪だるまは切なくも美しいものとなる。

精神科のしろばらすこしきいろ

長谷川柊香 宮城県

あどけない声。その声に含まれる『すこしきいろ』ということばがこんなに切ないのは、そこに、精神病患者に対する差別や偏見の歴史と、それが今もなお続いているという状況への問いが含まれるからだろう。

母さんが売れたひまわりが枯れた

まちりこ 埼玉県

母との隔絶をこれほど直接詠うのは簡単ではないだろう。透徹したまなざしによって捉えられることばに読み手は心を奪われる。同じ作者の作品に『運河ではなくて溺れる母の声』『笑わなくなった母／泣くことさえも忘れてしまった私／施設の冬にひとりと／ひとり』といったものがあるが、これらの作品も同様のモチーフからなる。作品の核心は、それが事実に基づくかどうかより、書き手の有するまなざしの方にあるだろう。

さくしゅって柑橘系の音がする

立花ばとん 東京都

作者は、かたちになる前のイメージを用いて新しい世界をつくろうとする。柑橘系の音ということばが胸にすんと落ちるのは、よく考えられた作品の構成と作者の耳のよさによるところが大きい。同じ作者の作品に『気づいたら木に／されているえびふらい』や『息継ぎするたび襲名しちゃう』といったものがある。

雨宿りと称して並んだバス停で  
待つバスのある誰かになりたい

源楓香 北海道

『誰かになりたい』という。待つバスさえあれば、自分ではなくてもいい誰かに。生きる目的がわからなくなったとき、自身の存在はどこまでも希薄なものになってしまう。同じ作者の作品に『永遠に妊娠できない僕たちは／街中の産声を燃やしたりした』というのがあるが、これは逆に追い詰められた僕の反乱なのかもしれない。

なに食べても味しないけどレスポ  
ールは平仮名だとなんか甘いボン  
ページも

吉富 快斗 埼玉県

ぶっきらぼうだし、言っていることにも愛想がないけれど、ぶつきたい気持ちだけは伝わってくる。結局これってロックなんだと思う。同じ作者の「防災無線のスピーカーを壊してま／わるきみの脇腹に望むだけの痣を／あげたら」や「いとおしいきみの春眠覚めてきみ／が白いサメの群れの夢を語る間に／指輪やる」といった作品についても同じ印象を受ける。

木の葉は  
空の落としものみたいに光るね。

こはくいろ      大阪府

もし『空の落としもの』だったらそれをみんなに伝えたい。そのすこしの光をみんなで分かち合いたい。そんな気持ちにさせてくれる作品。

ゆきふる  
ろうそく  
のとけた  
におい

im      沖縄県

ろうそくのとけた匂いと降る雪と。作品は、そのほかのものはすべて拒絶しているかのように見える。

身を投げるための改札 冬の蝶

玻璃      愛媛県

普段通る改札が身を投げるためのものとなる。それは日常にある危機意識の表れともいえるだろう。あらわれた冬の蝶は、登場人物の身代わりのようでもある。同じ作者の『錠剤の血へ溶ける音 蟹気楼』という作品も同様の印象を有するが、『春うららみんな季節のパンケーキ』といった明るい印象の作品もある。

春巻の中身見る

そういえば雪が降っている

村上　すう　　京都府

日々の中でそういえばということはよくある。そういえばご飯を炊くのを忘れる。そういえば蒲団を干したままにしてきた、など。けれど登場人物が『そういえば』で想起するのは『雪が降っている』ところで、それはなつかしい場所へとつなぐ呪文へと変わるのかもしれない。

そのほか佳作にまでは至らなかったが、同じ作者の『雪が音をすいこむときの音』という作品についても書き手の鋭敏な感受性を感じることができる。